

# 祭りと縁日

匠 探訪

— 57 —

正月から2月にかけて市内各地でさまざまな伝統行事が繰り広げられています。新聞の地方版やテレビなどでそれらが報道されるようになったのは、昭和40年代後半からのように記憶しています。当時は1973（昭和48）年の「若潮国体」開催に合わせるかの



市無形民俗文化財に指定されている「如意輪まいり」

ように、県内各地を紹介する出版物が刊行され、伝統行事なども掲載されました。そのころは、代表的な正月行事の男性による「オヒシヤ」や女性の「セイレン」などの呼び名が使われていましたが、調査するとまだ名称が付けられてない行事もありました。昭和53年発刊の『八日市場の村々』や市制施行30年記念出版の『狭布佐の祭』などにより浸透、定着するようになっていえます。

祭りは、地域の神社仏閣の縁日に実施されることが多く、正月のものは「初葉師」「初大師」「初天神」などと呼ばれています。縁日は、神仏の特別な縁のある日という意味です。2月になると、最初の午の日に初午があり、飯倉の「かがり炭」や飯塚・松峰神社などは特色のある行事とされています。

節分のあと立春を迎え、「こと八日」と呼ばれる2月8日には時曾根の「大蛇まつり」、「オダイハンニャ」など

があります。

筆者がこうした伝統行事を40年近くウォッチしてきた中でも変化が見られます。それは参加者が地域の人に限られる行事は、開催日を縁日から休日に変更したことです。

小高の「はだかまいり」は、元日を中心とする大正月に対し14、15日の「小正月」に行われたものが休日に変わりました。早朝から夜半までの神事を、形式を伝承したままの賢明な対応だったといえます。亀崎の「如意輪まいり」も江戸時代の「十九夜講」にならい従来2月19日に行われていたものを休日実施としました。保存会ができ、市文化財指定を受けるなど集落あげて行事を存続させようとする意気込みが感じられます。

これらに代表されるように、40年前には取材といえは市広報担当くらいで、今日のようにカメラマンに囲まれるようなことは稀で、これも大きな変化です。

観光写真コンクールや地域に根ざした保存会の存在、文化財指定などが祭りをいっそう盛り上げ、存続することになったといえます。

問 八日市場図書館 ☎ 73・3746